

共立女子中 ○青木 直子  
共立女短大 森 タミエ

唐衣裳の大きな特色は、広袖で丈の長い衤を何枚も重ねて着装する事であるが、これは俗称として一般に用いられる「十二単」という名称にも表われている。平安時代には、格式高い儀式ほど枚数を多くする傾向があり、全盛期には二十枚も重ねたという記録が残っている。この重ね衤が現在の着装構成で「五衣」の部分に当たり、衤や袖口、裾などの重なりから細い線となって見える配色に重点がおかれ、様々な「重ね色目」が生まれた。

本報では、近世の「五衣」について実地調査する機会を得た資料を中心に、技法の面から、五枚を別々に仕立てた御料と、五枚着装している様に見せた比翼仕立てになっている御料の違いについて検討してみた。五衣の特徴は、衤下が毛抜き合わせでおめりがなく、裾先は角裾となり、衤下から裾にかけて綿が入っている。又、着重ねる事を考慮して、寸法を袖丈、衤肩明、肩幅、袖付けでは、下に着装するものほど小さく、逆に身丈、袖幅では大きく仕立てられている。

調査した資料のうち、大正時代の皇后御料は、別々に仕立てたものが一度に着装できる様に、五枚を背縫い、脇縫い、衤付け、袖付け、衤付けの縫い目で18ヶ所をとり付けてあり、明治時代の第九皇女聡子内親王、及び昭和の北白川家の御料は、比翼仕立てとなっている。この比翼仕立ては、着装姿を別々に仕立てたものと同様に見せる為に、袖、衤、衤及び身ハツ口の上下5cmまでの部分だけを五枚重ねて、袖付け、及び衤付けの部分では、縫い代が厚くならない様に、裏側は身頃を上重ねるなど、技法の面で様々な工夫がなされている事がわかった。